

短 報

他者依存性と家族および友人との関係における ソーシャル・サポート —大学生を対象として—

福 岡 欣 治^{*1}

要 約

大学生を対象としてパーソナリティとしての他者依存性とソーシャル・サポートに関する認知との関連性を調べた先行研究によれば、他者依存性の強い人は、そうでない人とサポートの入手可能性では差がないにもかかわらず、多くのサポートを求める一方で現在のサポートに対する満足度は低く、さらに実際にサポートを受けることに対しては心理的な抵抗感が強い。本研究では、他者依存性の強さによるこのような特徴が、家族関係におけるソーシャル・サポートと友人関係におけるソーシャル・サポートで同様にみられるのかどうかを検討した。回答者は男子大学生103名と女子大学生84名であった。他者依存性の高低と性別による2要因分散分析の結果、家族関係については、他者依存性による違いは満足度以外にはみられなかったが、友人関係では先行研究とほぼ同様の他者依存性の高低による差異が認められた。この結果は、サポートの提供が義務的になされるか親密さにもとづいてなされるかという家族関係と友人関係の違いからくるものと解釈された。

問題と目的

研究の背景

ソーシャル・サポートの概念は、周囲の人々との支持的な対人関係の存在やそこから得られる援助が、その人の心身の健康に好ましい効果を持つことを示す数多くの研究を生み出してきた（たとえばCohen & Wills¹⁾；久田²⁾；浦³⁾；水野・谷口・福岡・古宮⁴⁾）。

しかしながら、ソーシャル・サポートの互惠性に関する研究でも明らかにされているとおり（たとえばRook⁵⁾；周・深田⁶⁾），他者に一方的に助けられたり助けを求めたりする関係は、心理的に望ましい状態とはいえない。直面する問題状況に応じた道具的な援助要請は、対処のために有用であり社会的スキルとしても必要なものである一方、恒常的なパーソナリティ特性としての他者への依存性は、抑うつ等の危険因子として取り上げられてきている⁷⁾。他者依存的な人は、その根底に養護的・支持的な関

係を獲得し維持したいという強い欲求を慢性的にもち⁸⁾，同時に、抑うつを始めとする種々の心理的苦痛に陥りやすいことが指摘されている⁹⁻¹¹⁾。

他者依存性とソーシャル・サポートに関する先行研究

他者依存性と心理的苦痛との関連性について、福岡¹²⁾はソーシャル・サポートの観点から検討している。大学生を対象としたこの研究では、他者依存性とソーシャル・サポートの入手可能性（知覚されたサポート）との間には有意な関係はなく、依存的な人はそうでない人と量的には同程度のサポートが得られると認知していた。しかし、心理的苦痛に対するソーシャル・サポートの効果は、依存性の低い人と異なり高い人では全く認められなかった。

さらに、福岡¹³⁾は、他者依存性の背景にある養護的・支持的な関係への強い欲求をふまえ、大学生を対象に他者依存性の高さとソーシャル・サポートの関係を調べた。その結果、他者依存性の高い人はサポートを得ることへの強い欲求をもち、入手可能性が低いわけではないにもかかわらずサポート関係へ

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療秘書学科

（連絡先）福岡欣治 〒701-0193 岡山県倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-Mail : fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

の満足度が低く、さらに実際にサポートを受けることに対しては、依存性の低い人よりも心理的な抵抗感（心理的負債感、自尊心への脅威）が強いことが示された。なお、福岡・橋本¹⁴⁾は、中年期の成人男女を対象として、ほぼ同様の結果を報告している。

本研究の目的

ただし、福岡¹³⁾や福岡・橋本¹⁴⁾で見いだされた他者依存性の高い人のソーシャル・サポートの特徴は、どのような対人関係についても同じようにみられるのであろうか。ソーシャル・サポート研究では、従来よりしばしば家族と友人別の測定がおこなわれている（たとえばProcidano & Heller¹⁵⁾；和田¹⁶⁾）。稲葉¹⁷⁾は、ソーシャル・サポートの効果に関する基本命題に言及する中で、家族内ではサポートの提供が規範的に要請されるのに対して、友人関係では相手との親密さに応じてサポートが交換されることを指摘している。このような観点からみたとき、家族関係よりも友人関係の方が、他者依存性の高さによるソーシャル・サポートに対する認知の違いが大きいのではないかと予想される。具体的には、他者依存性の高い人ほど、ソーシャル・サポートの現状に満足できず、他方サポートを得ることに対しては心理的な抵抗感をもつという結果が、家族関係のソーシャル・サポートよりも友人関係のソーシャル・サポートにおいて、相対的により強く現れると考えられる。本研究では、この仮説について、福岡¹³⁾と同じく大学生を対象とした調査を通して検討することを目的とした。

方 法

被調査者

大学生を対象とした調査において、男子103名（平均年齢19.53歳，SD = 0.97），女子84名（平均年齢18.80歳，SD = 1.00）の計187名から有効回答を得た。

測度

他者依存性 Hirschfeld et al.¹⁸⁾の他者依存性尺度（Interpersonal Dependency Scale）のMcDonald-Scott¹⁹⁾による 翻訳・短縮版から、福岡¹³⁾と同様に、「情緒的依頼心」（6項目）と「社会的な自信の欠如」（9項目）を抜粋してそれぞれの項目平均を求めた。そして、項目数の違いを考慮して、両者の平均値を他者依存性の指標とした。合成前の2尺度の α 係数は、「情緒的依頼心」が男女それぞれ0.68と0.71、「社会的な自信の欠如」が同じく0.79、0.82であり、両者の相関は同じく $r = .37, .38$ （いずれも $p < .001$ ）であった。

ソーシャル・サポート 福岡¹³⁾と同じ8項目（福岡・橋本²⁰⁾；福岡²¹⁾の4下位尺度より各2項目を抜粋したもの）を用い、「家族」と「友人」の別に、各項目について計7種類の指標を構成するための質問をおこなった。すなわち、まず各項目について、①欲求度、②入手可能性、③受け手になることに対する心理的な負債感、④受け手になることによる自尊心への脅威、⑤提供可能性、をそれぞれ6件法で回答するように求めた。さらに、同じ8項目について、「家族・親戚」と「友人その他」の別に、Sarason et al.²²⁾のSocial Support Questionnaire (SSQ)を参考に潜在的なサポート源を各6名まで挙げさせ（⑥サポート源の人数）、それらの人との関係についての満足度を7段階で評定させた（⑦満足度）。なお、分析にあたっては、各変数について男女別に α 係数を算出したところ1項目が複数の変数で内的整合性の点で不適切であることが示された。そこで、これを除く計7項目（表1）を用い、それぞれの平均値を指標として用いた（7項目での α 係数は表2を参照）。

実施方法

1995年6月下旬から7月上旬にかけて、X大学での心理学関係科目の受講者に調査への協力を依頼した。そして同意の得られた人に対して、配布後約3週間の提出期間を設けて回収した。

表1 ソーシャル・サポートの項目内容（採用された7項目）

私がやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり一緒に何かやったりして、私の気をまぎれさせる
私が忙しくしているとき、ちょっとした用事（家事や簡単な仕事など）の手助けをする
私が精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめる
私が緊急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき（家賃や学費の支払い、事故の弁償など）、その分のお金を貸す
私が学校や職場、地域、家庭などでの人間関係について悩んでいるとき、相談にのる
私が病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする
私が自分にとって重要なこと（たとえば進学や就・転職、長期ローンを組むべきかなど）を決めなくてはならないとき、アドバイスする

結 果

基礎統計量

家族関係および友人関係別に測定したソーシャル・サポートの各指標について、平均値と標準偏差を算出し、さらに男女差についてt検定をおこなった。各尺度の α 係数と合わせ、これらの結果を表2、表3に示す。

内的整合性に関しては、「欲求度」での α 係数が若干低かったものの、家族関係、友人関係ともにほぼ満足できるレベルであった。また、ソーシャル・サポートに関する一般的な先行研究（橋本²³⁾を参照）と同様、多くの変数で男子よりも女子の方が高得点であった。他者依存性については、男女で有意差はみられなかった（男子 $M=2.25$, $SD=0.49$, 女子 $M=2.34$, $SD=0.50$, $t(185)=1.19$, n.s.）。

なお、これらの値は、大学生を対象とした福岡¹³⁾とほぼ同様であった。

家族関係におけるソーシャル・サポートについての分析

福岡¹³⁾、福岡・橋本¹⁴⁾と同様、他者依存性の中央値により高群、低群を設定し、家族関係におけるソーシャル・サポートの各指標について、他者依存性×性別の2要因分散分析をおこなった。

その結果、満足度では他者依存性の主効果がみられ（ $F(1,183)=4.53$, $p<.05$ ）、他者依存性の高い人ほど家族とのサポート関係に対する満足度が有意に低かった。しかし、その他6つの指標については、他者依存性の主効果および交互作用に有意なものはみられなかった（ $F(1,183)=0.03\sim 2.17$, n.s.; 以上図1を参照）。なおt検定と同様、満足度、欲求度、入手可能性、提供可能性については性別の主効果が有意であり、男子より女子の方が高得点であった。

友人関係におけるソーシャル・サポートについての分析

友人関係におけるソーシャル・サポートについても、家族関係の場合と同様の分析をおこなった。すなわち、他者依存性の中央値によって高低2群を設定し、他者依存性×性別の2要因分散分析を、それぞれのソーシャル・サポート指標についておこなった。

その結果、サポート源の人数と提供可能性では、他者依存性による違いはみられなかった（ $F(1,183)=0.39$ と 0.66 , n.s.; 自由度以下同じ）。しかし、他の5つの指標では有意ないし有意傾向での他者依存性の主効果が見出された。すなわち、他者依存性が高い人ほど友人関係におけるソーシャル・サポー

表2 家族関係におけるソーシャル・サポート

指 標	男子			女子			t値 (df=185)
	Mean	SD	α	Mean	SD	α	
欲求度	3.80	0.75	.69	4.40	0.66	.65	5.70***
入手可能性	4.14	0.88	.80	4.65	0.70	.73	4.24***
心理的負債感	4.13	0.85	.83	4.30	0.70	.79	1.41
自尊心脅威	2.93	1.09	.86	3.03	1.05	.84	0.64
提供可能性	3.59	0.82	.82	4.05	0.71	.72	4.39*** ¹⁾
サポート源の人数	2.67	0.93	.88	2.70	0.85	.85	0.19
満足度	5.24	0.97	.89	5.87	0.71	.82	5.06*** ¹⁾

** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ (+) $p<.10$

¹⁾分散の有意差によりウェルチの検定をおこなった (df=183~184)

表3 友人関係におけるソーシャル・サポートの平均値

指 標	男子			女子			t値 (df=185)
	Mean	SD	α	Mean	SD	α	
欲求度	3.96	0.7	0.59	3.93	0.62	0.62	0.29
入手可能性	3.83	0.7	0.73	4.07	0.64	0.69	2.46*
心理的負債感	4.66	0.7	0.77	4.82	0.61	0.73	1.71(+)
自尊心脅威	3.16	1.05	0.84	3.51	0.9	0.82	2.41*
提供可能性	3.99	0.71	0.76	4.26	0.57	0.65	0.003
サポート源の人数	3.11	1.01	0.9	2.95	1.07	0.84	0.93
満足度	5.22	1.25	0.9	5.65	0.74	0.82	3.35*** ¹⁾

** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ (+) $p<.10$

¹⁾分散の有意差によりウェルチの検定をおこなった (df=183~184)

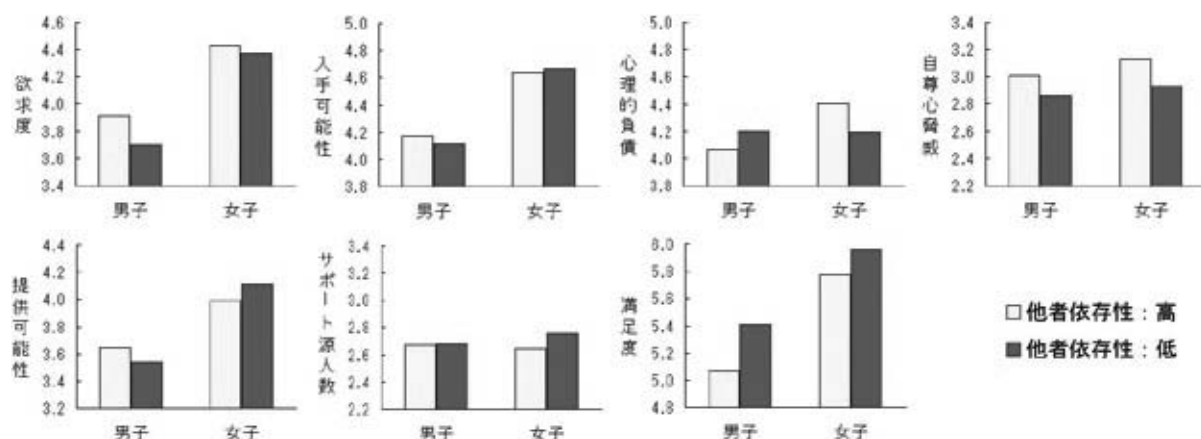


図1 他者依存性の高低と家族関係におけるソーシャル・サポート

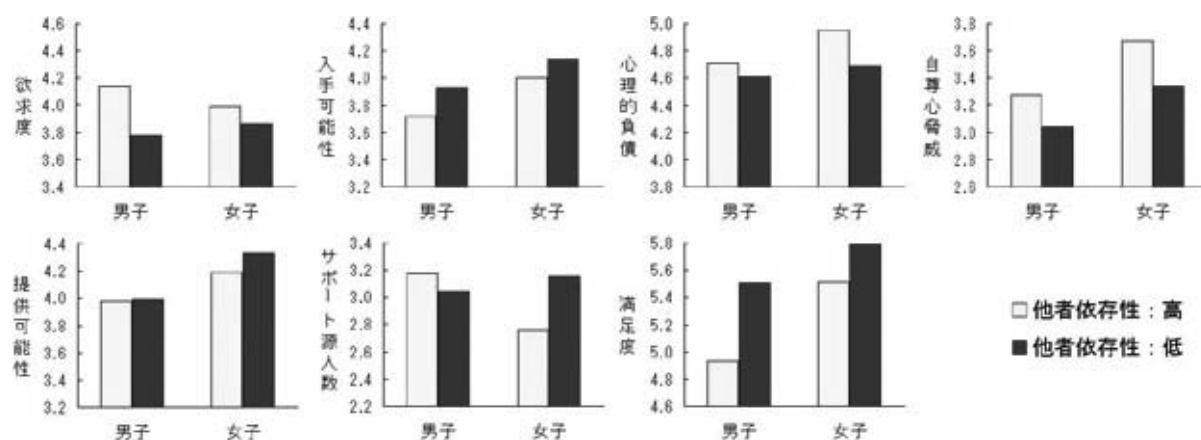


図2 他者依存性の高低と友人関係におけるソーシャル・サポート

トへの満足度が低く ($F = 11.97$, $p < .001$), 欲求度は高く ($F = 7.38$, $p < .01$), かつ実際に受け手になることへの心理的な抵抗感はより強くなる傾向がみられた (心理的負債感: $F = 3.28$, $p < .10$, 自尊心脅威: $F = 3.70$, $p < .10$). 入手可能性も, 他者依存性の高い人では若干低かった ($F = 3.32$, $p < .10$). なお t 検定と同様, サポート源の人数と欲求度を除く 5 指標では性別の主効果が有意であり, 男子より女子の方が高得点であった. 交互作用は, いずれの指標でも有意ではなかった (以上, 図 2 を参照).

考 察

仮説との関連

本研究の仮説にほぼ合致して, 他者依存性の高さがソーシャル・サポートへの認知に及ぼす影響は, 家族関係よりも友人関係のそれに強く表れていた. 他者依存性の高い人の方が, 友人関係におけるソーシャル・サポートをより多く求めているが, ソー

シャル・サポートの現状についての満足度が低く, なおかつ実際に友人からサポートを受けることに対しては心理的負債感や自尊心への脅威をより強く感じる傾向にあった. 特に, 後者の知見, すなわち友人からサポートされることへの心理的な抵抗感が相対的に強く存在する傾向にあることは, 直面する生活上の問題に応じて広く周囲にソーシャル・サポートを求めることを困難なものにし, 結果的にその問題への十分な対処を妨げることになると考えられる. このことは, 他者依存的な人がストレスの悪影響を受けやすく心理的苦痛を感じがちになることを示唆している.

本研究における仮説は, すでに述べたように, サポートの提供ないし交換に関する家族関係と友人関係の違いに関する議論を背景としている. サポートの交換が規範的に要請される家族関係においては, 相手に対して養護的な関わりを求めることが, 双方にとってある程度まで許容されていると考えられる. それに対して, 友人関係では一方的に援助やサポートを求めることは本来許容されず, もしそのよ

うな状態になれば互恵性への圧力が働くとともに、仮に互恵性が実現できなければ、相手との関係が脅かされることになると考えられる。他者依存性が心理的苦痛へとつながる悪影響には、このような特徴をもつものとしての友人関係におけるソーシャル・サポートが介在しているはずである。

今後の課題

本研究では大学生を対象として他者依存性とソーシャル・サポートとの関係性を検討したが、その結果には、青年期後期にさしかかっている大学生というサンプルの特徴が関連している可能性が高い。青年期後期はいわゆる「心理的離乳」の時期とされ、大学生は家族関係から友人関係へと対人関係の軸足を移していくが、しかししばしば両親との情緒的なつながりは維持されている。本研究の結果が大学生というサンプルを超えて一般化できるかどうかは、現時点では明らかではない。福岡・橋本¹⁴⁾は中年期の青年男女においても大学生¹³⁾とほぼ同様の結果を得てはいるが、たとえば家族や友人との関係がどのような意味をもつものとするか、という点について大学生と社会人は少なからず違った認識を持っている可能性がある。この点およびこのことが他者依存性とソーシャル・サポート、そしてこれらと心理的苦痛との関連性にどのような影響を及ぼすか、に

についての確認が必要である。

また、これは本研究の欠点というわけではないが、「依存性」という概念は、パーソナリティ特徴としてのそればかりではなく、発達的な観点から、より肯定的な意味をもつものとしても議論されている。たとえば竹澤・小玉^{24) 25)}は、従来の発達心理学的な依存性研究を概観し、本研究でも使用した他者依存性尺度に代表される人格障害的な依存性とは別に「適応的な役割を果たすものとしての依存性」に着目し、測定尺度を開発している。今後はこのような意味での依存性とソーシャル・サポートとの関連性について、本研究とは別の流れで検討していく必要もあると考えられる。

今後は、対象者の範囲を拡大し、また依存性に関連する他の視点も援用しながら、他者依存性とソーシャル・サポート、および心理的苦痛との関連性を検討していくべきであろう。

本論文は、著者と橋本幸同志社大学文学部教授（当時）との共同研究の一部に新たな観点を加えてまとめ直したものであり、本論文のデータにもとづく最初の報告は、日本健康心理学会第10回大会（1997）においておこなわれた。調査の実施に協力していただいた先生方、および回答者の皆様に対し、改めて御礼申し上げます。

文 献

- 1) Cohen S and Wills TA : Social support and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357, 1985.
- 2) 久田満：ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題。看護研究, **20**, 170-179, 1987.
- 3) 浦光博：支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—（セレクション社会心理学8），初版，サイエンス社，東京，1992.
- 4) 水野治久，谷口弘一，福岡欣治，古宮昇：カウンセリングとソーシャルサポート—つながり支えあう心理学—。初版，ナカニシヤ出版，京都，2007.
- 5) Rook KS : Reciprocity of social exchange and social satisfaction among older women. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 145-154, 1987.
- 6) 周玉慧，深田博己：ソーシャル・サポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響。心理学研究, **67**, 33-41, 1996.
- 7) Bornstein RF : The Dependent Personality. Gullford Press, New York, 1993.
- 8) Bornstein RF : The dependent personality— Developmental, social, and clinical perspectives. *Psychological Bulletin*, **112**, 3-23, 1992.
- 9) Blat SJ D'Afflitti JP and Quinlan DM : Experiences of depression in normal young adults. *Journal of Abnormal Psychology*, **88**, 388-397, 1976.
- 10) Bornstein RF and Johnson JG : Dependency and psychopathology in a nonclinical sample. *Journal of Social Behavior and Personality*, **5**, 417-422, 1990.
- 11) Overholser JC : Interpersonal dependency and social loss. *Personality and Individual Differences*, **13**, 17-23, 1992.
- 12) 福岡欣治：依存的な人にとってのソーシャル・サポートの限界—他者依存性と知覚されたサポートの効果に関する基礎的研究—。静岡県立大学短期大学部研究紀要（Web版），12-3, 4-14-11. http://sizcol.u-shizuoka-ken.ac.jp/~kiyou/12_3.html, 1998.

- 13) 福岡欣治：他者依存性と心理的苦痛の關係に及ぼすソーシャル・サポートの影響．対人社会心理学研究, **3**, 9-14, 2003.
- 14) 福岡欣治, 橋本宰：成人における他者依存性とソーシャル・サポート．日本健康心理学会第9回大会発表論文集, 130-131, 1996.
- 15) Procidano ME and Heller K : Measures of perceived social support from friends and from family – Three validation studies. *American Journal of Community Psychology*, **11**, 1-24, 1983.
- 16) 和田実：大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響．教育心理学研究, **40**, 386-393, 1992.
- 17) 稲葉昭英：ソーシャル・サポートの理論モデル．松井豊, 浦光博（編著）, 対人行動学研究シリーズ7 人を支える心の科学．誠信書房, 東京, 151-175, 1998.
- 18) Hirschfeld RMA, Klerman GL, Gough HG, Barrett J, Korchin SJ, and Chodoff P : A measure of interpersonal dependency. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 610-618, 1977.
- 19) McDonald-Scott P : INTERPERSONAL DEPENDENCY INVENTORY Japanese Short Form (JIDI) – その作成と検定について．看護研究, **21**, 451-460, 1988.
- 20) 福岡欣治, 橋本宰：内容別にみた知覚されたサポートの効果について．同志社心理, **42**, 11-22, 1995.
- 21) 福岡欣治：ソーシャル・サポート内容およびサポート源の分類について．日本心理学会第64回大会発表論文集, 144, 2000.
- 22) Sarason IG, Levine H. Basham RB, and Sarason BR : Assessing social support – The Social Support Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 469-480, 1983.
- 23) 橋本剛：対人關係に支えられる．和田実（編著）, 男と女の対人心理学, 京都, 北大路書房, 137-158, 2005.
- 24) 竹澤みどり, 小玉正博：青年期後期における依存性の適応的観点からの検討．教育心理学研究, **52**, 310-319, 2004.
- 25) 竹澤みどり, 小玉正博：適応的な依存とは？—依存概念の再検討, 筑波大学心理学研究, **31**, 73-86, 2006.

（平成22年5月10日受理）

Interpersonal Dependency and Social Support for University Students Seen from the Perspective of Relationships with Family and Friends

Yoshiharu FUKUOKA

(Accepted May 10, 2010)

Key words : interpersonal dependency, social support, family, friends, late adolescence

Abstract

Previous research into the relationship between interpersonal dependency and cognition of social support revealed that students with high levels of interpersonal dependency required more support than students who did not have high levels of interpersonal dependency. Although the high level group had equal access to support, results showed they had low levels of satisfaction with the support given and had a strong resistance to getting support. The present study investigated whether these characteristics were also observed in cases when support was given by family and friends. University students (n = 187: 103 men and 84 women) participated in the study. A two-way analysis of variance was conducted on the degree of interpersonal dependency and gender. The result indicated that, with the exception of satisfaction levels, there were no significant differences caused by the degree of interpersonal dependency when support was given by the family. These results contrast with the previous study in which a student's level of interpersonal dependency resulted in significant differences in these variables. It is suggested that this discrepancy is due to the difference between family and friends: whether the support was given from a sense of duty or friendship.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA

Department of Medical Secretarial Arts
Faculty of Health and Welfare Services Administration
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail : fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.20, No.1, 2010 259 – 265)